

明星大学全学共通教育の 新カリキュラムと「クロッシング科目」

上 田 耕 造

はじめに

2023年4月から、明星大学全学共通教育では、新しいカリキュラムが始まった。明星大学全学共通教育委員会では、「つなぐ学び」を基本理念として、2021年3月から徐々に新たなカリキュラム作成に向けて動き出した。明星大学における全学共通教育はどうあるべきか、語学教育、教養教育、キャリア教育などの枠組みをどのように設定すべきか、また全学共通教育にはどのような科目が必要かなどを検討し、新たなカリキュラムを作成していった。

現在、教養教育の重要性が見直され、各大学でも教養教育の改革が行われている。中世ヨーロッパの大学で設定されたりベラルアーツは、形を変えて今の大学における一般教養科目に受け継がれてきた。こうした伝統を踏まえつつ、明星大学全学共通教育委員会は、21世紀の世界において必要とされる教養とは何か、学生がこれからの社会で生きていくために必要不可欠な教養とは何かを考え、21世紀型の教養教育のカリキュラムを新たに立ち上げた。以下では、その全体像を示すとともに、新カリキュラムにおいて注目すべき点である「クロッシング科目」に関して、その実施状況を具体的に紹介していく。

1. 新カリキュラムの概要

まずは、2023年4月から始まった新カリキュラムの全体像を、以下の図で示す。

新カリキュラムでは、必修科目として新たに「世界の言葉と文化を知る」が設置された。多文化共生の現代社会において、様々な言語、そして文化に触れることは必要不可欠である。こうした理念のもと、「世界の言葉と文化を知る」は、選択科目ではなく必修科目として設定されることになった。

新しいカリキュラムには、「多摩に学ぶ」「言葉で世界につながる」「健康に生きる」「考えを広げる(知識を知恵に①)」「考えをクロスさせる(知識を知恵に②)」「教養を深める」の6つのカテゴリーがあり、それぞれのカテゴリーには、多種多様な科目が設置されている。

「考えを広げる(知識を知恵に①)」の中には、物理学や歴史学など、様々な学問分野に関する科

現代社会での生き方を考える	
必修科目	学びとキャリア、世界の言葉と文化を知る、データサイエンスリテラシー、健康スポーツ科学論
多摩に学ぶ	多摩と生活、多摩を歩く、多摩と自然、大学論
言葉で世界につながる	外国語（英、独、仏、西、韓、中）、海外語学研修A、海外語学研修B
健康に生きる	体育スポーツ科学実践A、体育スポーツ科学実践B、現代スポーツ論、身体論
考えを広げる（知識を知恵に①）	生物学から見える世界、生活の中の化学、物理学で読み解く世界、地球惑星学、数学で社会を見る、科学技術が作り出す世界、私たちの暮らしと環境科学、科学技術が作り出す世界、現代社会と工学、情報の活用と倫理、地理学で知る生活・文化・環境、現代社会の仕組み、政治学から見える社会、国際関係を読み解く、社会に生きる私たちの人権、ジェンダーを考える、図書館の基礎と展望、現代経済への視点、法學から見える社会、日本国憲法、グローバル時代の経営、情報社会文化論、統計から見える世界、教育と21世紀の社会、生涯学習論、ボランティア論、テーマで学ぶ歴史、グローバル・ヒストリー、日本の歴史と文化、日本文化の深淵、哲学から考える人間、哲学から考える世界、宗教と人間、遺物が語る世界、世界の人々の生活と文化、芸術の見方、文学の世界に浸る、人間と言葉、心理学と人々の行動、都市と建築、音楽と社会・文化との結びつき、地域研究（イスラム世界、アジア、アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ）、食から見えるからだと文化、学問の世界
考えをクロスさせる（知識を知恵に②）	人類とその環境（文化人類学×生物学×哲学）、戦争と安全保障（地政学×歴史学）、現代社会と平和（社会学×政治学）、気候と人口の問題（社会学×環境学）、ポスト経済成長時代の未来論（社会学×経済学）、社会の中の法（法学×社会学）、宗教から見える現代社会（歴史学×宗教学）、アートとアートの境界線（芸術学×哲学）、世界の芸術とその深層（芸術学×文化人類学）、創造される歴史と人々が紡ぐ歴史（歴史学×文化人類学）、21世紀の社会像を描く（社会学×経営学×教育学）、ELSI（科学技術における倫理的、法的、社会的課題）（哲学×生物学）、これからのエネルギーとその利用（化学×社会学）、文学作品のメタファー（文学×生物学）、都市という空間（環境学×地理学×建築学）、ことばと文化の結びつき（言語学×文化人類学）、母語から見える世界と外国語から見える世界（言語学×言語学）、ことばの窓から広がる世界（言語学×社会学）、スポーツと外国語（スポーツ実践×語学）、世界の身体文化（スポーツ科学×文化人類学）、スポーツを通して地域を学ぶ（スポーツ×多摩×教育学）、スポーツとテクノロジー（スポーツ実践×自然科学）、境界線上の日本学（比較文化×哲学）、ダイバーシティ&インクルージョン（ジェンダー×社会学）、サステナビリティと人類社会（社会学×開発学）
教養を深める	教養ゼミ1、教養ゼミ2、教養ゼミ3、教養ゼミ4

図 全学共通教育 新カリキュラム 全体図

目が揃っている。これまでのカリキュラムでは、「物理学」や「西洋の歴史と文化」といった科目名がつけられていたが、新カリキュラムでは、「物理学で読み解く世界」や「グローバル・ヒストリー」など、より具体的に科目の内容がわかる科目名へと変更した。また、各科目の内容も、それぞれの学問分野がどのような特徴を持っているのか、その学問分野が他の学問分野とどのようなつながりがあるのか、さらに、我々の日常生活や現代社会とその学問分野とが、どのような関わりがあるのかなどを扱うものへと改めた。こうした変更により、学生はより実用的で実践的な教養を修得することができるはずである。

「考えをクロスさせる（知識を知恵に②）」の中には、新たなカリキュラムの開始にともなって新設された科目が配置されている。「スポーツと外国語」「世界の芸術のその深層」「アートとアートの境界線」「創造される歴史と人々が紡ぐ歴史」「母語から見える世界と外国語から見える世界」などは、ひとつのテーマを様々な学問分野からアプローチしていく科目である。また、「ELSI（科学技術における倫理的、法的、社会的課題）」「21世紀の社会像を描く」「ポスト経済成長期の未来論」「気候と人口の問題」「戦争と安全保障」「これからのエネルギーとその利用」などは、科目名を見てもわかるように、現代社会が抱える問題や課題にまつわる科目である。

現代社会の諸問題は、様々な要素が複雑に絡み合っている。それゆえ、ひとつの視点だけではその全体像は把握できず、またひとつの学問分野からアプローチするだけでは、その問題の解決策は見えてこない。また、各学問分野においても、近年は学際的な研究が必要とされ、文理融合も促されている。つまり、これから生きていく学生たちには、物事を多角的に捉える視点と、複数の学問分野を掛け合わせて思考する能力が求められる。こうした21世紀の社会を鑑みて新設されたのが、「考えをクロスさせる（知識を知恵に②）」の中にある科目であり、これらの科目のことを「クロッシング科目」と名づけた。

「クロッシング科目」は、上記のように複数の学問分野が関わることから、専門分野の異なる複数の教員がひとつの科目を担当する。こうした授業形態は、これまでオムニバスという形式で行わ

れてきた。オムニバス授業では、基本的にひとつのテーマに対して担当教員がそれぞれの専門分野から講義をするだけである。しかし、この新設の科目では、ひとつの授業内で担当教員が同時に登壇する回が設定されている。その際、教員たちはテーマに対する見解を各専門分野の見地から述べ、議論を行う。また、教員間で意見を出し合うだけでなく、そこに学生からも意見を出してもらう。こうした授業形態を取り入れることで、テーマに対する理解が深まるとともに、学生たちには複眼的に物事を捉えることと、学問分野を掛け合わせて物事を理解することを実際に体験してもらうことができる。従来のオムニバス授業とは異なり、より実用性が増した授業が、「クロッシング科目」では展開される。

以上が、新カリキュラムの概要であるが、以下では、「クロッシング科目」の実践例をいくつか紹介していく。

2. 「クロッシング科目」の実践例

筆者はいくつかの「クロッシング科目」に携わっている。本稿ではその中で、ふたつの授業を取り上げる。このふたつは、いずれも4人の教員が担当者となり、多くの学問分野が掛け合わされた授業であった。

①実践例1：21世紀の社会像を描く

21世紀の社会には、どのような特徴があるのか。現在の社会には、貧困や差別、地球温暖化など様々な問題が溢れている。こうした21世紀の社会の現状を踏まえつつ、これからの21世紀を見通していく。以上が本科目の主題である。授業を担当したのは、西洋史を専門とする教育学部教育学科の上田耕造、社会福祉を専門とする人文学部福祉実践学科の浅井正行、環境動態分析を専門とする理工学部総合理工学科の櫻井達也、経営学を専門とする経営学部経営学科の伊藤智久の4人である。全15回の講義テーマは以下である。

- 第1回【担当教員全員】ガイダンス：21世紀の社会について考える
- 第2回【上田】21世紀の国際情勢：ウクライナ戦争の背景
- 第3回【上田】冷戦：アメリカ（資本主義）か、ソ連（共産主義）か？
- 第4回【上田】冷戦の終結：21世紀の社会はどのように変化するか？
- 第5回【伊藤】イノベーションと仕事の未来
- 第6回【伊藤】情報通信技術のイノベーションと社会の変容
- 第7回【伊藤】イノベーターに求められる能力
- 第8回【担当教員全員】中間まとめ
- 第9回【櫻井】地球環境問題について考える
- 第10回【櫻井】持続型社会の実現について考える
- 第11回【櫻井】エネルギー問題について考える

- 第12回【浅井】「多文化ソーシャルワーク」とは？：内なるグローバル化への適応方法
- 第13回【浅井】「マイノリティ」を考える！：人種・障害・LGBTQの視点から
- 第14回【浅井】人々を救う「面接技法」を実践する！：人の人生を左右する「その一言」とは
- 第15回【担当教員全員】講義のまとめ：改めて、21世紀の社会について考える

第1回の授業では担当教員が全員登壇し、各教員がどのような内容の講義を行うかの簡単な紹介を行った。第1回の講義が始まる前に、学生には事前に「21世紀の社会」と聞いて、みなさんがイメージすること、「21世紀の社会」について、みなさんが考えていること、また「21世紀の社会」が抱える問題とそれについてみなさんが考えていることを自由に書いてください」というアンケートを実施していた。アンケートの結果として、「21世紀の社会と聞いてイメージするもの」としては、多様性やAIの進化などの用語があがり、「21世紀の社会が抱える問題」としては、環境問題や地球温暖化、そして少子化問題などがあげられた。こうしたアンケート結果に対して、各教員がそれぞれの専門分野の立場からコメントを行い、意見が重なり合う部分、あるいは意見が異なる部分などを抽出した。こうして第1回で、専門分野をクロスさせて物事を捉えるとは、どのようなことなのかを学生たちに提示し、第2回からは、担当教員各自の講義に入っていった。

第2回から第4回までは、上田が担当した。ウクライナ戦争を切り口に、21世紀の社会情勢を冷戦の歴史を辿りながら講義しつつ、その背後にある政治的、社会的「分断」について解説した。第5回から第7回までは伊藤が担当し、イノベーションをキーワードに、イノベーションが起こる状況や、イノベーションがもたらす社会の変化、そしてイノベーターの資質について触れつつ、これからの社会を見通す講義を行った。

第8回の授業では、中間のまとめとして、第1回の授業と同様、担当教員全員が登壇した。この回では、まず上田と伊藤がそれぞれの講義の振り返りを行い、その後、櫻井と浅井から、それぞれの専門分野の見地から、ふたりの講義に対してどのようなことを考え、またどのような点に疑問を感じたかなどのコメントをもらった。次に、上田と伊藤の講義を踏まえて、学生にたちに以下のような問題を設定し、4人1組でグループワークを行ってもらった。

■問題

「伊藤先生の授業で扱ったイノベーション、情報通信技術(AIの発展)を想定したり、イノベーターに求められる能力などを考慮したりして、21世紀の社会にある戦争や社会的分断(国家間や民族間の対立、国内における保守派とリベラルとの対立、富裕層と貧困層の対立など…)の解決策を考えてみてください。」

※考えるヒント

- ・AIの進化によって、戦争の解決や社会的分断の解消はできるのか。
- ・どのようなイノベーションが起きれば、あるいは、どのような技術が開発されれば、戦争の解決は導かれ、社会的分断が解消されていくのでしょうか？
- ・直接的、あるいは間接的な影響を考えてもいいかもしれません。

問題設定が難しく、学生も議論がしづらかったようで、この点は今後の改善点であるが、以上の問題を通して、学生たちに上田と伊藤の講義を掛け合わせると、21世紀の社会をどのように捉えることができるのかを考えてもらった。

続く第9回から第11回までは櫻井が担当し、21世紀における地球環境の問題を基調として、カーボンニュートラルを含めた環境問題を解決するための理想と現実、そしてこの現実の問題に関わる原子力発電を含めたエネルギーの問題について解説した。第12回から第14回までは浅井が担当し、多文化ソーシャルワークや障害者福祉の理念を紹介しつつ、現代社会におけるこれらの要素の重要性を述べ、さらにはグループワークを通して、ふたつの理念を実際に体験する講義を行った。

第15回の講義では、第9回から第14回までの講義のまとめと、講義全体の総括として、再度、担当教員全員が登壇した。まずは櫻井、浅井が講義の振り返りを行い、その後、伊藤、上田から櫻井、浅井の講義に対して、それぞれの専門分野の視点からコメントを行った。その後、講義全体のまとめとして、学生たちに以下のような問いでグループワークを行ってもらった。

■問い

1. グループ内で、各自が「21世紀の社会像を描く」の授業で印象に残っていること、授業を受けて考えたことを、なぜ印象に残っているのか、なぜそのように考えたのかの理由とともに発表する。
2. 各自の発表後、グループ内の意見を総合して、21世紀の社会は、どのような特徴を持つのか、また、今後の未来（今後の21世紀）はどのように展開していくのか、グループ内で「21世紀の社会像」を描いてみてください。

問い自体、各学生の見解を示すことが中心であり、その後、グループ内で各自の見解をすり合わせる課題であったことから、学生たちは比較的議論がしやすかったようである。それぞれのグループで各人が積極的に意見を出し合い、21世紀の社会像について議論していた。最後にグループ内で話し合われた内容を発表してもらい、受講者の間で意見を共有するとともに、各教員からもそれぞれのグループの見解に対してコメントをしてもらった。

②実践例2：都市という空間

都市という空間には、様々な歴史的記憶が積み重なっていると同時に、多種多様な人々が暮らしている。こうした都市というものは、どのようにして形作られ、またその中で暮らす人々の活動が、どのような問題を生じさせているのか。こうした問いに取り組んでいくのが、本科目の主題である。授業を担当したのは、西洋史を専門とする教育学部教育学科の上田耕造、人文地理学を専門とする教育学部教育学科の高橋珠州彦、デザイン学を専門とするデザイン学部デザイン学科の萩原修、都市気象・熱環境を専門とする理工学部総合理工学科の亀卦川幸浩の4人である。全15回の講義テーマは、以下の通りである。

- 第1回【全教員】オリエンテーション：「都市」を考える様々な視点
- 第2回【上田】古代ローマ帝国における都市：快適な暮らしと帝国による支配
- 第3回【上田】中世ヨーロッパにおける都市：城壁で囲まれた都市
- 第4回【上田】パリの歴史をたどる：様々な記憶が集約された都市
- 第5回【高橋】地理学で読み解く「都市と農村」：都市の成り立ちと理論、農村との関わり
- 第6回【高橋】都市に生きる人びと：商店を営む

- 第7回【高橋】都市に生きる人びと：細民・マイノリティ・雑踏など
- 第8回【全教員】総合討論1：
第2回～第7回の講義内容と学生レポートをもとにした意見交換
- 第9回【萩原】メディアから見える都市の姿
- 第10回【萩原】デザインからみる都市と住宅
- 第11回【萩原】都市におけるコミュニティのデザイン
- 第12回【亀卦川】都市と気候変動(その1)：気候変動問題の概観(気候変動を知っていますか?)
- 第13回【亀卦川】都市と気候変動(その2)：都市が生じさせる気候・環境への負荷
- 第14回【亀卦川】都市と気候変動(その3)：気候変動がもたらす都市への影響とその軽減策
- 第15回【全教員】総合討論2：
第9回～第14回の講義内容と学生レポートをもとにした意見交換

第1回の講義では、担当教員全員が登壇し、それぞれの教員がどのような内容の講義を行うかの説明を行った。また、学生たちには第1回の講義準備として、事前に以下のようなアンケートを行っていた。

質問

本授業の受講を開始する前に、以下の設問にしたがって、皆さんの「イメージ」や「考え」などを教えてください。

Q1. あなたは「都市」が好きですか？ 嫌いですか？

1. 「都市」が好き
2. 「都市」が嫌い
3. どちらでもない

その理由も教えてください。

Q2. 皆さんが「都市だ」と思う(考える)場所の地名を3つと、そう思う理由をそれぞれ教えてください

地名1

理由

地名2

理由

地名3

理由

Q3. 「都市」とはどういう場所ですか？(役割や機能、「都市」のイメージなど)

Q4. 「都市」の優位だと思う点(メリット)と劣位だと思う点(デメリット)を、その理由も含めて教えてください。

優位だと思う点(メリット)

劣位だと思う点(デメリット)

Q5. あなたの出身地について、教えてください。(「〇〇県〇〇市」など)

アンケートの結果を利用して、都市に対するイメージや都市という空間が持つ特徴について確認した。さらに各教員からそれぞれの専門分野の視点を踏まえつつ、都市をどのように定義するか、また都市の特徴をどのように捉えるかなどの意見を出し合いつつ、専門分野に応じて都市の捉え方、あるいは注目すべき部分が異なることを確認した。第1回の授業では、都市という空間が持つ多面性を学生たちと共有しつつ、さらに学問分野を掛け合わせれば、新たにどのような都市の側面が見えてくるのかを、学生たちに思索するように促した。

第2回からは、各教員の個別の講義に入っていた。第2回から第4回までは、上田が担当した。古代から近代まで、それぞれの時代において都市が果たしていた役割が異なること、そして積み重ねられた歴史が都市の中に刻み込まれていることを、バリを事例として紹介した。第5回から第7回までは高橋が担当し、都市がどのようにして形作られていくのかを、都市と農村との関係から説明しつつ、さらに都市に暮らす様々な人々を紹介することで、都市には多様性とともな匿名性があることを解説した。

第7回の講義が終了するとともに、学生には中間のまとめとして、「上田先生担当回の授業（第2回～第4回）、高橋先生担当回の授業（第5回～第7回）、それぞれの内容をまとめつつ、それぞれの授業を通してみなさんが疑問に思った点や質問、印象に残っている点、または感想などを書いてください」というレポートを作成してもらった。第8回の講義では、最初に、上田、高橋の順で講義の振り返りをし、次にふたりの講義に対して萩原、亀卦川から、それぞれデザイン学、都市環境学の視点からコメントをもらった。その後、学生が作成したレポートで「都市の発展性」に関する質問や疑問があげられていたことから、この点をテーマとして取り上げ、4人1組のグループを組んで、「都市は発展するものなのか」「都市の発展とは具体的にどのような事象なのか」について話し合ってもらった。

第9回から第11回までは萩原が担当し、都市とデザインとの関係について解説するとともに、コミュニケーションの場としての都市のあり方、人々が共生し、より良い空間を作っていく場所としての都市について講義した。また、萩原の講義では、2人1組で多摩地区にある都市の魅力を紹介するプレゼンも行った。第12回から第14回までは亀卦川が担当し、気候変動の問題を取り上げつつ、都市で起こるヒートアイランド現象が、地球温暖化にもたらす影響について解説するとともに、気候変動の問題に、我々はどのように向き合っていかなければならないのかについて考える講義を行った。

その後、学生には「萩原先生担当回の授業（第9回～第11回）、亀卦川先生担当回の授業（第12回～第14回）、それぞれの内容をまとめつつ、それぞれの授業を通してみなさんが疑問に思った点や質問、印象に残っている点、または感想などを書いてください」との課題を作成してもらった。第15回の講義では、第9回から第14回までの講義の振り返りを萩原、亀卦川が行い、その後、上田、高橋からそれぞれ歴史学と地理学の視点から、ふたりの講義に対するコメントを行った。最後に講義全体のまとめとして、4人1組のグループを作り、そこで学生それぞれが、「都市という空間」をどのように捉えたかについて話をしてもらい、グループ内で意見交換を行ってもらった。また最終レポートとして授業後に、以下なレポートを作成してもらった。

【課題】

本授業で扱った「都市の成り立ち」や「歴史」、「都市構造」や「都市に関わる諸制度」、「都市が直面する（あるいは内包する）課題」など全ての授業内容を踏まえ、各自が関心を持つもので関連のあるものを2つ以上取り上げ、その関連性や問題の成り立ち、解決策などについて2,000字程度で論じなさい。

【条件】

- ・歴史学・地理学・デザイン学・気候学の4つの視点をなるべく多く取り入れつつ論じる。
- ・授業で扱った内容を2つ以上取り上げ、関連付けて論じる。

「都市という空間」という科目内で行われた各専門分野の講義と、第1回、第8回、第15回と教員間で行われた専門分野を掛け合わせる意見交換、そしてグループワークで行われた学生間での意見交換を踏まえて、最終レポート課題では、学生それぞれが授業の内容をクロスさせ、新たな知見を得る作業を行なってもらった。

3. 「クロッシング科目」に関するアンケート

クロッシング科目終了後に、以下のようなアンケートを学生に行った。まずはアンケートの項目を記す。

①あなたがこの授業を選択した理由を選んでください。

1. 授業名に興味・関心があった。
2. シラバスを見ておもしろそうだと感じた。
3. 友人が選択したことに合わせて選択した。
4. 時間割の都合上、この授業を選択した。
5. その他

②この授業を受けて、あなたは新たな知識や経験を得ることができましたか。

1. よくできた。
2. ほぼできた。
3. どちらでもない。
4. できなかった。
5. 全くできなかった。

③この授業を受けて、あなたは学習意欲は向上したと感じますか。

1. そのように感じる。
2. ほぼそのように感じる。
3. どちらでもない。
4. そのように感じない。
5. 全くそのように感じない。

- ④この授業を受けて、あなたは自分が興味・関心を持つ分野が広がったと感じますか。
1. 広がったと感じる。
 2. ほぼ広がったと感じる。
 3. どちらでもない。
 4. 広がったとは感じない。
 5. 全く広がったとは感じない。
- ⑤この授業を受けて、あなたは物事を幅広い視野で捉えることができるようになったと感じますか。
1. できるようになったと感じる。
 2. ほぼできるようになったと感じる。
 3. どちらでもない。
 4. できるようになったと感じない。
 5. 全くできるようになったと感じない。
- ⑥この授業において、あなたはそれぞれの先生が担当した講義と講義とのつながりや関連性を見出すことができましたか。
1. 見出すことができました。
 2. ほぼ見出すことができました。
 3. どちらでもない。
 4. 見出すことができなかった。
 5. 全く見出すことができなかった。
- ⑦この授業を受けて、あなたは次にどのような分野の授業を受けたいと考えるようになりましたか。
- ⑧この授業、全15回を受けての感想（よかった点、改善点など）を自由に書いてください。

表1 21世紀の社会像を描く（履修者：77人、回答者：53人）

①	②	③	④	⑤	⑥
1:24人	1:28人	1:25人	1:30人	1:25人	1:24人
2:18人	2:24人	2:19人	2:18人	2:23人	2:24人
3:1人	3:0人	3:8人	3:3人	3:2人	3:4人
4:10人	4:0人	4:0人	4:0人	4:1人	4:0人
5:0人	5:1人	5:1人	5:1人	5:1人	5:1人

表2 都市という空間（履修者：130人、回答者：76人）

①	②	③	④	⑤	⑥
1:43人	1:22人	1:25人	1:34人	1:29人	1:21人
2:17人	2:47人	2:33人	2:31人	2:31人	2:38人
3:5人	3:6人	3:13人	3:8人	3:13人	3:15人
4:11人	4:0人	4:4人	4:3人	4:3人	4:2人
5:0人	5:1人	5:1人	5:0人	5:0人	5:0人

表1、表2は、アンケートの質問①～⑥に対する回答を集計したものである。「21世紀の社会像を描く」に関しては、授業内容に関する質問である②～⑥の回答を見てみると、いずれの質問にお

いても回答の多くは1あるいは2であり、9割近い学生がポジティブな回答を行ってくれた。「クロッシング科目」の核に関する質問である⑤と⑥において、多くの学生が1あるいは2の回答をしてくれた点は注目に値するであろう。⑤と⑥の質問を掘り下げるべく、⑦と⑧で自由記述の質問を行ったが、ここでもこの授業に対するポジティブな意見を受けた。以下でその一部を紹介する。

⑦この授業を受けて、あなたは次にどのような分野の授業を受けたいと考えるようになりましたか。

この授業と同じようなクロッシング授業を受けたいと思いました。
マーケティングの分野について講義を受けたいと思った。今回の講義を受けて、ウクライナ戦争の影響で物価が上昇したことにより、企業はどのような取り組みをしているのか。また、変化が激しい中で課題を特定して解決するために、マーケティングを変えているのか。さらに、SDGsを取り入れることの企業側のメリットは何か。ほかにも男女差別をなくすためにどのような取り組みをしているのかなどを学びたいと考えている。
環境問題への対応や再生可能エネルギーの普及についてなど、今後の社会をより良くするために欠かせないものについて学び、21世紀の社会についてもっと考えていきたい。
日本の社会情勢だけでなく、世界の社会情勢にも目を向けたいので、世界史の授業を受けたいと思った。
環境問題や AI などの発展について、21世紀のことをあらゆる視点から学びたいと思った。
環境問題と政治問題を絡めた授業を受けたいと思った。
AI などの次世代技術についてもっと学びたいと思った。自分たちが大人になった頃の生活は想像もつかないので、今後どんな技術が生まれていくのかとても楽しみである
環境問題の分野と、社会でのマイノリティとマジョリティに関する分野の授業を受けたいと考えるようになりました。

⑧この授業、全 15 回を受けての感想（よかった点、改善点など）を自由に書いてください。

21世紀のこれからを考える上で、今までは経営側からしかみていませんでしたが、多方面から見ることができ、自分の視野が広がったように感じます。また、今回の授業で多方面からひとつのことについて見ていく、ということがどれだけ考えの幅を広げてくれるかということかがわかりました。今後はその学びを活かし、大きな規模に限らず、小さい規模のものから大きい規模のものまで、ひとつの方面から見るのではなく、多方面からの視点を持つことを意識していきます。
私は歴史や経営の視点からの授業を最初は興味があって受けていたが、櫻井先生や浅井先生の授業のようにあまり最初は興味がなかった分野も受けてみたら面白かった。自分の知らなかった分野について浅くでも触れることによって今までなかった知識を得ることができて良かった。
グループワークで意見を交換することで、視野が広がり、21世紀の社会像について深く考えることができてよかった。また、クロッシング授業により、異なる視点から学ぶことができ、より幅広い知識と理解を得ることができたと思う。
各先生ごとにほとんど言っていることが被らず、一人一人の意見があるなかで、自分自身は各分野を関連させつつ21世紀について考えていた。そのため、どの授業も関心を持って取り組めた。

<p>色々な先生の授業が受けられ自分の学んでいる学科以外の情報を知れたと同時に、この後の選択授業を取る際に活かせるなと思いました。</p>
<p>様々な議題について先生達がそれぞれ違う角度で講義を行ってくれるので、そういう考え方もできるのかと自分の知識が増えていった。グループワークでも、他の人の意見と組み合わせることで自分の考え方が変わったり、より良い意見が変わったりしてとても自分のためになる授業だったと感じる。</p>
<p>この講義を受けて、冷戦に伴う分断やイノベーションの発案方法、エネルギー問題に関する思考方法、そしてマイノリティに対する接し方と差別に対する諸対策の具体例を学ぶことができた。今まで、これらの事象は全て異なる問題だと思っていたが講義の内容に触れることによって実は様々な経路を通して繋がっていることが理解できた。今後も、書籍やインターネットで情報を収集したり、現地を訪れたりすることでさらなる知見を深めていきたい。</p>
<p>新しい知識が身についたというのもそうですが、それ以上に昨今起きている課題に目を向ける機会となって良かったと思いました。4人の先生がグループワークや掲示板など、自分の意見を表出する機会を設けてくださったこともあり、自分なりの課題へのアプローチを考えることが出来ました。</p>
<p>それぞれ専門が違う先生の講義がひとつの授業で聞けたのもすごいお徳感があった。また、どの先生の授業でも面白いと思えるものもあり、新しい知識を得るとともに、自分の興味関心の幅が広がった。今後の授業展開として、この授業のような様々な分野について学べる授業をつくり、必修にしてみたいのではないかと考える。なぜなら、ひとつの授業で多分野のことを学ぶことによって、自分の将来について考えるきっかけになると思うからだ。正直、何を専門として、どんな職について、何をするか明確に決まっていない学生が多い。そんな学生のために、さまざまな分野について学べる機会があると自分のキャリアを決めるひとつの手がかりとなるかもしれない。また、将来何になって何をしようか決まっている人にとっても、より具体的に考えるチャンスになると思う。卒論の方向性を考えるにもよいかもしれない。私は、前期の間、この授業に関しては、とても楽しみで得るものの多かった授業だったと思う。</p>

「都市という空間」においても、質問①～⑥の回答を見てみると、ポジティブな回答である1と2が多かった。ただ、「クロッシング科目」の核に関する質問である⑤と⑥において、3の「どちらでもない」という回答が、「21世紀の社会像を描く」に比べて多かった。この点は改善点であり、今後、学生が講義間のつながりを見つけられるような工夫をしていく必要があるだろう。一方、自由記述を見てみると、ある程度、この授業から他分野への興味関心が広がったように思われる。以下でアンケート結果の一部を紹介する。

⑦この授業を受けて、あなたは次にどのような分野の授業を受けたいと考えるようになりましたか。

<p>まちとデザインに関することを学びたい。西洋や日本などの歴史、環境は学部の授業で習うが、まちとのつながりについてはいまだに習ってないため、興味がある。</p>
<p>都市について調べてるうちに少子高齢化や環境問題が出てきたので、これらの問題解決の分野の授業を受けてみたいです。</p>
<p>「都市」の中でも都市計画やまちづくりの分野について詳しく学んでみたいです。</p>
<p>デザイン関係の分野の授業。地域だけでなく企画とか。</p>

今回受けた授業のような、ふたつの異なる事柄を関連づけて考えていくような授業を受けたいと考えています。
地理や気候に関する講義の際に、経済学に通ずる部分があると感じたので3年になったら都市経済学を取ってみたいと思うようになりました。
どの授業も、とても発見のある授業であり、それぞれの分野から見た都市というものをもっと詳しく知りたいと思った。
都市という空間で今回授業でやった分野の視点以外から見るというのもおもしろそうだなと思いました。

⑧この授業、全15回を受けての感想（よかった点、改善点など）を自由に書いてください。

先生たちが楽しそうにお互いの授業を聞いて議論を交わしていたのが印象的でした。その先生たちの議論は聞いていてとても面白かったです。自分が考えていたこととは違う視点から切り込んでいくのが多々見られたのでとても興味深かったです。それと個人的にはそれぞれの先生たちのスライドのクセや授業スタイルのクセが見えて面白かったです。
違う視点から見た都市に対しての教授同士の意見交換が他の講義ではなかなか聞けるものではなくとても面白く感じました。
4人の先生がそれぞれの分野ごとに話していたが、中間レポートと最後のレポートとしてそれぞれの分野を関連づける課題を行ったことで、各分野の関わりが理解出来ました。
私は、最初は都市という空間というものについて強い興味はなかったが、授業を受けているうちに都市は様々なものから影響を受けてさらに色々なものに影響を与えていることが分かって面白い分野だなと思うようになった。教育について学んでいるが、教育の面から見ても都市は子どもとも深い関わりを持っているのだと気づくことができた。
気候について初めて詳しく学ぶことができた。地球温暖化の原因やそれによって日本が今後どうなるのかを学び、考えることがとても興味深かった。分野が違う先生同士での意見交換を聴くのも面白かった。
授業はとても面白かったです。クロッシング授業ということで四人の先生が様々な視点からひとつの話題について話し、意見交換をするというのが聞いていて飽きないし、ほかの授業に比べて蓄えられた知識が多かったなと感じました。
様々な分野の視点から都市について考えられたのが面白かった。他にもクロッシングの授業があつたら受けてみたいと強く思いました。
「都市」という巨大なスケールのもを扱ったが、クロッシング授業との相性が良いと思った。さまざまな分野の視点から考えることの重要性を学ぶとともに都市への理解が深まった。改善点を挙げるとすれば、2回あった総合討論では議題についてじっくり考察する時間がなかったので、議題について事前にある程度考えおきたかった。
4つの視点からそれぞれバラバラに都市について話していたのですが、1つ大筋を作って、それについてそれぞれの観点から話してもらった方が関連性などは見つけやすいのかなと感じました。

おわりに

以上、明星大学全学共通教育の新カリキュラムの概要及び特徴を述べるとともに、「クロッシング科目」の実践例を示し、最後に「クロッシング科目」の受講者に行った「クロッシング科目」に関するアンケートとその結果を紹介した。今年が新カリキュラムの初年度ということもあり、手探りの状況で授業運営を行なっている部分もあるため、改善すべき点も少なからずある。先にも述べたが、講義と講義の関連性を学生に思考させる工夫などは、今後も検討していかなければならないだろう。ただ、この点に関しては、少し補足が必要である。「クロッシング科目」は、学問分野のつながりを教員側が提示するのではなく、学生自身で見つけてもらうことこそが重要である。教員側が一例を示したり、その導きとなる要素を提示したりすることはあるが、それらを使い思考を掛け合わせていくのは、学生自身の仕事なのである。自ら実践してこそ、知識は生きた知恵になる。学生の思考を促す「仕掛け」を今後も検討していきたい。

アンケート結果を見る限りでは、「クロッシング科目」は概ね順調に進んでいるように思われる。また、「クロッシング科目」を通して学生に修得してもらいたいと考えていた、複眼的視点で物事を捉える能力や、学問分野を掛け合わせて物事を考える思考力に関しても、アンケート結果を見る限りは、ある程度達成できているように思われる。

「クロッシング科目」は、今回紹介した以外にも多くあり、まだアンケートの集計ができていないものもある。また2023年度後期に開講されている「クロッシング科目」もあり、これらの授業に関しては、これからアンケートをとることになる。アンケート結果が集まり分析が進めば、より詳細に新カリキュラムの評価を行うことができるであろう。また「クロッシング科目」の成果をはかるためには、「クロッシング科目」を受講した学生のその後の成長にも注目する必要があるだろう。こうした総評に関しては、また別稿で行いたい。